



早稲田大学総長 殿

年 月 日

所 属 基幹理工学部
資 格 教授
氏 名 内田種臣 印

特 別 研 究 期 間 研 究 成 果 報 告 書

1. 研究課題：インタラクティブな記号生成の研究
2. 研究期間：2007年4月 1日 ～ 2008年3月 1日
3. 研究場所（国/都市・機関名）：
4. 研究成果概要（2,000字以内）：

身体が備わっているという命題を前提にすれば、「セミオーシスの中」というイメージ（これもセミオーシスの一部であるが）を使わざるを得ない。しかし「身体を備えている」という命題は何を意味しているか、明白という訳ではない。（これは心身問題の重要なテーマである。）

存在は無意味であり、意味を論じる前提である。様相という概念を考えると、存在もそんなにはつきりしたものではない。存在は論理の前提である。こういう意味で視点を動かすものである。こういう表現も身体があるというイメージが意味を与えているけれども、＜視点＞というメタファーは大きな意味を持っている。ここで言ったことを理解するにも＜身体＞があることに対するイメージを前提にしないと何もできない。

視点の動きなくしては何も理解できない。視点の動きが意味であって、意味があってそれを視点が見るのではない。選ばれた視点というものはない。超越的視点とか、客観的視点とか、主観的視点などというものは無意味である。窓を通して見た世界の一部分を投影したものが絵画であるというアルベルティの定義あたりからはつきり変化が起こっている。中世では視点は、＜いくつもいくつも寄せ集めてある＞と言われる。視点の移動も一方向の直線ではない、あらゆる角度から見たり見られたりと、報告されている。神とか理想的な科学者とは、違った生活があった。歴史性の概念が全く違っていたのではないか。どんな経験も未完成である。余白がある。日常の経験の中では、空白の部分はかなり多いが、「正常な意識」の範囲におさまる程度に、そういうものは無意識的である。演劇的世界や科学の世界から、自然、日常性、ひいては現実との回路を設定しておくこと、パースのセミオーシスのように、適度に「空白」があるのが現実である。

＜趣味空間＞の展開としてのパフォーマンス。スクリーンが＜窓＞だとすれば、扉はスクリーンのおかれた＜場＞であり、扉はどこにあっても見えない。窓の画像によって、扉という＜行為＞をとおして、物の経験を解釈する。もっと一般的に言うと、写真、テレビ、ビデオ、映画、インターネット上のページ、スクリーンなどは、すべて絵文字であり、これらの絵文字を使って中世の人々のように、世界を解釈しているのである。

解釈するとはなにか？フルッサーが疑問視するように、「＜客観性＞が可能でもなく望ましくもないような科学は、どんなものになるだろうか？一つの視点をとることではなくどんどん視点を変える

ことが進歩であるような政治は、どんなものになるだろうか？」解釈とは、何かを何かとして解釈するのである。真な解釈？

これまで<真>とは、認識者が認識対象にだんだん適合してゆく過程>であったし、認識が物に到達することであった。しかし、対象でさえ、われわれの言語行為によって、対象にされるのである。言語行為によって<対象>になるのである。このように世界について他者と合意する試みになる。世界の中で他者ととも生きることができるために解釈するのだ。

<物>ではなく、<物の経験>という扉で、見えない扉と言う言い方をしたが、経済の世界でも、変化が起こっている。<物>を生産、流通させ、販売するという経済ではなくて、<経験に関わる経済><経験の変革>をビジネスとするものである。ドナルド・ノーマンは言っている。「モノをしとやかに劣化させて、持ち主とともにパーソナルで心地よく古くなるようにする。情動的価値、これこそデザインの価値あるゴールである。」所有者の経験（エクスペリエンス）を反映したものがデザインできるようにするということである。しかし、これこそ、チンクトミハイとロッホバーガーホルトンの（パースやジョン・デューイの）プラグマティストが「物の意味」で分析していたことである。

スクリーンというのは<窓>であるという考えであるから、多様な視点の同時的、周辺の動きとして、マルチスクリーンを採用している。だから、ここでは単独の画像ではなく、メディアスケープのようなものを考えなければならないが、まだ、スクリーン上の画像である。メディアの融合とか統合というより、むしろいろいろなジャンルのメディアが持っている媒介性を再調整するという構想である。

※研究終了後2ヶ月以内に提出してください。ワープロ原稿の貼付けも可。なお、学術研究活動情報（学術年鑑 Web）のホームページに掲載しますので、電子メールでも研究支援課まで（tokkenseika@list.waseda.jp）ご提出くださるようご協力をお願いします。

特別研究期間研究成果概要[つづき]（2,000字以内）

氏名：内田種臣